



講師 / 文学士

福田 修

Osamu Fukuda

学歴

都留文科大学 文学部 初等教育学科卒業

経歴

大飯町立大飯中学校教諭 鯖江市立東陽中学校教諭 福井県立科学技術高等学校教諭
福井県立丹南高等学校教諭 福井県立武生高等学校教諭 福井県立道守高等学校教頭
福井県立金津高等学校校長 福井県高等学校校長協会副会長（平成30年度・令和元年度）

相談・講演・共同研究に応じられるテーマ

国語教育 教職全般 教員研修 教員養成 教職支援

メールアドレス

samu29814@fukui-ut.ac.jp



主な研究と特徴

「国語教育について」

私は、大学卒業以来、高等学校および中学校で国語科の教師として教壇に立ってきた。また、平成30・31年度の2か年間福井県高等学校教育研究会国語部会長として、県内外の多くの国語科教師および国語教育研究者の実践や研究発表に触れる機会を得た。現在、高等学校では令和4年度から学年進行で実施される新学習指導要領導入に向けて教育課程の編成等の準備が進行中である。高等学校国語教育の課題については、平成28年12月の中教審答申で『①教材の読み取りが指導の中心になることが多い②主体的な表現等が重視された授業が十分行われていない③「話すこと・聞くこと」「書くこと」の学習が不十分である』の3点が指摘された。特に①の指摘について賛同する意見は多く、根本彰氏（東京大学名誉教授）は「日本の義務教育における国語教育は、漢字の読み書きができ、文章の書き手の意図を読み取る力を身につけるところで終わっている。したがってテストも、筆者が何を言いたいのかを出題者が尋ね、その意図通りの答えを正解としてきた。いわば「他者に寄り添う」力を問うてきた。つまり、日本における「読解力」は、書き手の意図を読み取る力でしかない。」と手厳しい。この中教審答申の指摘を受けて、今回の学習指導要領高等学校国語科の改訂では、今まで以上に国語科としての資質・能力の向上を図る構成とするため、育成すべき資質・能力の観点から科目構成と領域構成の変更が行われ、領域別の単位時間が規定された。このことは、国語科の各科目において各領域で育成すべき「内容」の指導事項を時間数として確実に行わなくてはならないことを示している。新設される「現代の国語」を例にとると、「話すこと・聞くこと」20～30単位、「書くこと」30～40単位、「読むこと」10～20単位となる。新学習指導要領導入に伴って、国語教育においても、生徒自らが自由に意見を記述し、それを論理的に発表して他者と意見を交わしていくことに重点を置いた『主体的・対話的で深い学び』が加速度的に広まっていくことが大いに期待される。この学びが、グローバル時代に対応する人材を育成するために不可欠なものであることは言うまでもない。

今後の展望

大学生向けの塾「猫の手ゼミナール」代表である渡邊峻氏は「教科書の内容が理解できない、授業についていけない、という学生は少なくない。彼らは、数学や物理といった専門知識以前に、国語力に問題を抱え、課題の小論文やリポートで、最初の一文を書けず手が止まってしまう。」と述べている。このような現状を耳にする時、長く高等学校や中学校で国語教育に携わってきた一人として、その責任を痛感する。基盤教育機構の教員として、本学の学生たちが大学での学びだけでなく、就職や社会人としての活動において、困ることを少しでも減らせるよう、彼らの「国語力」向上に寄与できれと考えている。

主要論文・著書

平成30・31年度 福井県高等学校教育研究会国語部会誌「国文学」巻頭言